

近世前期における米沢藩の修史事業と山吉家

矢田 俊文

はじめに

中世古文書学研究には、機能論・様式論などさまざまな分野がある。伝来論もそのひとつである。本稿は古文書学研究のうちの伝来論の一事例研究である。伝来論といってもさまざまな研究が必要であるが、現存する中世文書がどのような経過をたどって伝来したのかを追究することは重要な研究であると考ええる。中世文書は、近世・近代をへて現在に伝来をしているのであるから、近世・近代にどのように伝来をしたのかを検討することなしに、中世文書の伝来を論ずることはできない。

たとえば、上杉家文書の中には、本来、柿崎家・平子家に伝来すべき文書が混ざって、現在、上杉家文書として伝来している。⁽¹⁾ 柿崎家・平子家に伝来すべき文書が上杉家に混入したのは、柿崎家・平子家が米沢藩に文書を差出したのち、返却されなかったことにある。では、藩への差出しはいかなる契機で行われたのであろうか。本稿は近世における中世文書の差出しがいかなる契機で行われたのかについて考察する。

一 山吉家の文書差出し

近世における中世文書の差出しがいかなる契機で行われたのかについて考察するために、元禄十六年（一七〇三）に書写された「越後三条山吉家伝記之写」の検討を行う。すでに田島光男氏・浅倉有子氏⁽²⁾が本史料を活用して、山吉家文書の伝来や米沢藩の修史事業について論じているが、山吉家の家蔵文書差し出しの全体像を明らかにしようとしたものではないので、改めて論ずることにする。

以下、山吉家の中世文書差出しを論ずるにあたって必要な箇所を、『越後三条山吉家伝記之写（影印）』⁽⁴⁾から翻刻する。

一、元禄四年九月中、御家中御尋御書御感状御取上、御記録被成立候、依之、先祖被下置候御書御感状、九月廿五日、組頭山田縫殿右衛門所迄持参申候、同年十一月廿日二、組頭所被相返候、御記録ハ矢尾板三印被仰付候、御感状御書指上申候注文之事、

一、御感状 五通 内 四通ハ 山吉玄蕃景長へ 一通ハ 同玄蕃入道景久へ

一、御書 五通 内 四通ハ 諸関通り判 玄蕃景長へ 一通ハ 四通ハ 歳暮年頭

一、上杉管領憲房公御書 壱通 山吉孫五郎政_レ景_ハ

一、上杉掃部頭定俊公御書 二通 右同人

一、上条入道宜順_ル御書 壱通 山吉玄蕃景長_ハ

一、長尾伊玄入道_ル御状 壱通 山吉孫五郎景政

一、北条氏康公^ノ御書 壺通 山吉孫次郎

一、直江山城守兼統奉書 壺通 山吉玄蕃景長^ハ

ノ十七通

右之通、御記録方^ニて見届写取候て、御返し被成候由、御尋候節、御触之趣ハ、御先祖様^ノ御書御感状被致所持候て、本書を被指出候、但他家^ノ面々先祖^ハ參候古状^并他国^ノ御家中^ハ參候古状たりとも持候分、不殘可指出候事、

九月廿三日 須田右近

一、元禄 二月十五日ハ書付を以御尋左^ニ記、

一、^{マ、}覺

一、景勝様御書御朱印、先年被差出候^ヘ共、持殘之者、此方^ハ被指出候、

一、謙信様 宗正様御書御朱印之御判難見分^ハおいてハ、御双方様共^ニ可被差出候、

一、泉沢河内守・直江山城守其外御用人等、公用有之書状等、可被差出候、

一、惣而、御先祖様之覺書自分と取集致所持候者於有之者、如何様之物成共、可被指出候、

一、家々自分之覺書^ニ 宗正様^ハ御奉公申上候品書留致所持候ハ、縦如何様之物成共、無遠慮、此度可被指出候、以
上、

二月十五日

松木彦右衛門

春日右衛門

須田右近

右之通、御尋^ニ付て、古状共指出申候左^ニ記、八月中御返し被成候、

物数廿四通

- 一、景勝公御書御感狀 拾通 一、直江山城守奉書 壺通
- 一、上杉憲房公御書 壺通 一、長尾小四郎・鯨坂清介狀 壺通
- 一、上杉掃部頭定俊御書 式通 一、長授院妙壽書狀 壺通
- 一、上条入道宜順様御書 壺通 一、藤田新太郎書狀 式通
- 一、北條氏康様御書 式通 一、杖林斎禅棟書狀 壺通
- 一、長尾伊玄入道御狀 壺通 一、遠山左衛門書狀 壺通
- 一、山吉玄蕃覺書 式通 内 新潟・沼垂注進之者書付 壺つ
玄蕃景長御奉書立候 壺つ

一、山吉玄蕃景長御知行御加増并米沢ニ相渡候書付、穴沢九兵衛を頼御記録所へ追而指出申候、其後相返り申候、
メ廿七通

一、三条之帳ハ不出候、代々此帳ハ不出帳也、

一、景次代、寛永十六年十月十九日、御書十御前へ指上、定勝公御上覧有て御返し被下候云、此砌、景次御前へ被召出、
三条之城図・木場之城図御尋被遊候処ニ、不存候由御答申上候、景次成程存候へ共、口上ニて御聞被遊候を、キヤ
ウフニ存申故ニ不存由申上候と云、

一、昌長代、寛文十年十一月六日、御書御感狀共、其外古狀共ヲ竹俣勘解由殿へ為見申候、長尾権四郎殿江戸御番手ニ
御登候節、権四郎殿迄遣候而、勘解由殿へ懸御目申候由、此砌、三条生之者書付越申留、
越後三条生之者之覺

山吉右衛門 七郎右衛門先祖

山吉源左衛門 五左衛門先祖

宮原監物 庄之助先祖

横目藏人 安兵衛先祖

石付清七郎 宇右衛門先祖

小鷹孫三郎 治部左衛門先祖

黒井弥七郎 六右衛門先祖

上松弥兵衛 弥二右衛門先祖

早川式部 甚兵衛先祖

初海枝右馬之助 九郎左衛門先祖

河野弥右衛門 弥右衛門先祖

右之通、竹俣勘解由殿書越申事、乍次手、爰_ニ記也、

以上の山吉家の史料から、米沢藩の行為を中心に山吉家の文書差出しの記事を編年に並べ直せば、以下のようなになる。

a 一、景次代、寛永十六年十月十九日、御書十御前指上、定勝公御上覧有て御返し被下候云、

b 一、昌長代_ニ、寛文十年十一月六日、御書御感状共、其外古状共ヲ竹俣勘解由殿へ為見申候、長尾権四郎殿江戸御番手ニ御登候節、権四郎殿迄遣候而、勘解由殿へ懸御目申候由、

c 御先祖様る御書御感状被致所持候て、本書を被指出候、但他家る面々先祖へ参候古状并他国る御家中へ参候古状たりとも持候分、不残可指出候事、

九月廿三日

須田右近

d 一、元禄四年九月中、御家中御尋御書御感状御取上、御記録被成立候、依之、先祖へ被下置候御書御感状、九月廿五日、組頭山田縫殿右衛門所迄持参申候、

e 同年十一月廿日二、組頭所より被相返候、御記録ハ矢尾板三印被仰付候、

f 一、元禄 二月十五日ハ書付を以御尋左二記、

一、 覚

一、景勝様御書御朱印、先年被差出候へ共、持残之者、此方へ被指出候、

一、謙信様 宗正様御書御朱印之御判難見分おいてハ、御双方様共二可被差出候、

一、泉沢河内守・直江山城守其外御用人等、公用有之書状等、可被差出候、

一、惣而、御先祖様之覚書自分と取集致所持候者於有之者、如何様之物成共、可被差出候、

一、家々自分之覚書二 宗正様へ御奉公申上候品書留致所持候ハ、縦如何様之物成共、無遠慮、此度可被指出候、

以上、

二月十五日

松木彦右衛門

春日右衛門

須田右近

右之通、御尋ニ付て、

g 古状共指出申候、八月中御返し被成候、

a 〃 g をまとめ直せば、次のようになろう。

a 寛永十六年（一六三九）十月十九日、「御書」を御前に差上げ、藩主上杉定勝が見て山吉家に返却した。

b 寛文十年（一六七〇）十一月六日、御書・御感状、そのほか古状を竹俣勘解由へ見せた。その時は、長尾権四郎が江戸御番手として登るときに、権四郎のところにもっていった。

c 〃 e は、元禄四年（一六九二）の記事である。

c 元禄四年九月二十三日、米沢藩から、各家で先祖から持っている「御書御感状」の「本書」、他家から先祖にきた「古状」、他国より家中へ来た「古状」を残らず差出すようにとの触れが出される。

d 九月二十三日の触れにより、山吉家は九月二十五日、御書・御感状を組頭山田縫殿右衛門のところまでもっていった。

e 差出した御書・御感状は、同年十一月二十日に、組頭の山田縫殿右衛門のところより返却された。記録は、矢尾板三印が仰せ付けられた。

f 〃 g は田島光男氏は元禄九年（一六九六）のことであるとする。⁽⁵⁾

f 元禄九年二月十五日、米沢藩は、松本彦左衛門・春日右衛門・須田右近、三名の連署で、先年、文書を差出させたが、まだ差出していない残りの文書を差出すように命じた。

g 藩に命ぜられたので、山吉家は「古状共」を差出し、その年の八月中に返却してもらった。

以上が元禄十六年（一七〇三）に書写された「越後三条山吉家伝記之写」からわかる山吉家から米沢藩への文書差出しの歴史である。米沢藩は元禄十六年までに、山吉家に寛永十六年（一六三九）、寛文十年（一六七〇）、元禄四年（一六九二）、元禄九年（一六九六）の四度、文書の差出しを命じていたのである。

二 米沢藩と家中等文書差出し

米沢藩は、山吉家に寛永十六年（一六三九）、寛文十年（一六七〇）、元禄四年（一六九二）、元禄九年（一六九六）の四度、文書の差出しを命じ、山吉家はその都度その要求に応じ文書を差出していた。では、米沢藩の他家ではどうか。

すでに元禄四年に上杉家中の中条家・島津（花沢）家・柿崎家・平子家伝来の文書が米沢藩に差出されたことについてはすでに明らかにしている。⁽⁶⁾ここで改めて、元禄四年の中条家・島津（花沢）家・柿崎家・平子家の文書差出しについて見てみよう。

中条兵四郎は、元禄四年九月二十八日、十通の家蔵文書を差出している。⁽⁷⁾島津（花沢）伊兵衛は、元禄五年二月十四日に十四通の家蔵文書を差出している。⁽⁸⁾柿崎源左衛門は、九月二十八日、六通の家蔵文書を差出している。⁽⁹⁾平子太兵衛は、元禄四年十月五日、四十通の「御書・御感状改之目録」を作成している。⁽¹⁰⁾

中条家は九月二十八日、柿崎家も九月二十八日に差出している。平子家は十月五日に「御書・御感状改之目録」を作成しているので、この頃に、文書を差出したと思われる。島津（花沢）家はすこし遅れて、翌年の二月十四日に差出している。山吉家は元禄四年九月二十五日に差出している。山吉家・中条家・柿崎家・平子家・島津（花沢）家は元禄四年九月二十五日から翌元禄五年二月十四日の間に文書を藩に差出している。

このことから考えると、「越後三条山吉家伝記之写」所収の文書にあるように、米沢藩は元禄四年九月二十三日に家蔵文書の差出しを命じたことは間違いないと思われる。

元禄四年差出しの家蔵文書は、米沢藩編集の「謙信公御書」等の編纂物としてまとめられた。⁽¹¹⁾山吉家は、元禄四年の差

出しの際残った家蔵文書を、元禄九年に差出しているがこの点はどうであらうか。

元禄九年（一六九六）に差出した家蔵文書も、「謙信公御書」等の編纂物としてまとめられている。⁽¹³⁾「謙信公御書 重而出ル全」と表紙題簽のある史料には、「元禄九年二月廿五日、重而出ル謙信公御書并諸士より之状之認」という記載がある。すでにみたように、「越後三条山吉家伝記之写」によると、元禄九年二月十五日、米沢藩は、先年、文書を差出させたが、まだ差出していない残りの文書を差出すように命じている。追って差出された家蔵文書も編纂されたのである。

次に寛文十年（一六七〇）の場合を見てみよう。山吉家は先ほどみたように、寛文十年十一月六日、御書・御感状、そのほか古状を竹俣勘解由へ見せている。では他の家はどうか。柿崎源佐衛門は、元禄四年九月二十六日、米沢藩に家蔵文書を差出した時の文書の文中に、「輝虎様より北条左衛門大夫殿・北条相模守之御書之写壺通、是者先年竹俣勘解由、在江戸之、本書指上申候」とあるので、柿崎家も山吉家と同様に、竹俣勘解由に文書を差出したことがわかる。

「竹俣勘解由」とは竹俣勘解由義秀のことで、上杉家古案改帳の奥には、⁽¹⁴⁾「寛文十一年亥十一月十三日於江戸改之 竹俣勘解由義秀（花押）」とある。

古案改帳は上杉家中から取り集めた文書（古案）が列挙されたものである。また、古案改帳は寛文十一年十一月十三日に作成されたのであるから、山吉家が寛文十年十一月六日、御書・御感状、そのほか古状を竹俣勘解由へ見せたと、「越後三条山吉家伝記之写」に書かれていることと符号する。寛文十一年十一月頃に家中の家蔵文書が竹俣義秀に差出されたことはまちがいないであらう。

「越後三条山吉家伝記之写」に記された米沢藩による山吉家の家蔵文書差出しの検討で残った事項は、寛永十六年（一六三九）に「御書」を御前に差上げ、二代藩主定勝が見て山吉家に返却したという記事である。最後にこの寛永十六年の差出しについて検討しよう。

寛永十六年十月、米沢藩は家中に御書・御感状等の藩士の家蔵文書の差出しを命じている。⁽¹⁵⁾ また、上杉定勝は、主として謙信・景勝発給の文書二〇一通、条目・禁制・掟書・制札等四九通を書写した「古筆案」を作成している。⁽¹⁶⁾ 浅倉有子氏は、この寛永十六年の文書差出しが藩主定勝作成の「古筆案」編纂とつながる事業となったとしている。⁽¹⁷⁾ よって、「越後三条山吉家伝記之写」の寛永十六年（一六三九）十月十九日、「御書」を御前に差上げ、藩主定勝が見て山吉家に返却したという記事は、米沢二代藩主上杉定勝作成の「古筆案」作成と対応すると考えてよからう。

おわりに

以上、「越後三条山吉家伝記之写」に見られる山吉家による寛永十六年（一六三九）、寛文十年（一六七〇）、元禄四年（一六九一）、元禄九年（一六九六）の四度の家蔵文書差出しの記事を検討してきた。明らかになったことは以下の通りである。

寛永十六年の差出しは米沢二代藩主上杉定勝作成の「古筆案」作成と対応すること、寛文十年の差出しは竹俣義秀の古案改帳作成に対応すること、元禄四年の差出しは米沢藩編集の「謙信公御書」等の編纂物に対応すること、さらに、元禄九年の差出しも米沢藩の「謙信公御書」等の編纂物に対応することが明らかになった。

すでに、浅倉有子氏は「謙信公御書」等は、直接には元禄四年に編纂が開始され元禄九年五月に謙信分二十冊が完成した「御年譜」編纂の史料として編集されたものと考えられるとしている。⁽¹⁸⁾ 元禄四年と元禄九年に家中から差出させた文書によって編纂された「謙信公御書」等の編纂物はいつ成立したものであろうか。「御年譜」編纂とどのように関わっているのか。明らかにしなければならない課題は多い。

- (1) 矢田俊文「元禄四年の上杉家中諸家文書差上と「米沢藩御書集」」「上杉家御書集成Ⅰ」上越市、二〇〇一年、同「中世平子文書の伝来と越後平子氏」『特別展 鎌倉御家人平子氏の西遷・北遷』横浜歴史博物館、二〇〇三年
- (2) 田島光男「上杉氏家中山吉氏文書の伝来について」『郷土神奈川』三〇号、一九九二年
- (3) 浅倉有子「近世前期における米沢藩の修史事業と「御年譜」編さん」『上杉家御書集成Ⅰ』上越市、二〇〇一年
- (4) 『越後三条山吉家伝記之写（影印）』文林堂書店、一九七四年
- (5) 田島光男前掲「上杉氏家中山吉氏文書の伝来について」
- (6) 矢田俊文前掲「元禄四年の上杉家中諸家文書差上と「米沢藩御書集」」、同前掲「中世平子文書の伝来と越後平子氏」
- (7) 早稲田大学図書館所蔵中条家文書
- (8) 埼玉県立文書館寄託石垣家文書。石垣家は上杉家中の島津家文書を伝来した家である。
- (9) 柿崎雅人氏所蔵文書
- (10) 平子家所蔵文書。平子氏は米沢藩士ではない。
- (11) 「謙信公御書」等の編纂物の全体像については、福原圭一「米沢藩御書集」と『上杉家御書集成Ⅰ』上越市、二〇〇一年を参照されたい。
- (12) これらの史料の一部は『上杉家御書集成Ⅰ』上越市、二〇〇一年、『上杉家御書集成Ⅱ』上越市、二〇〇二年に翻刻されている。
- (13) 元禄四年のものと同様、これらの史料の一部は『上杉家御書集成Ⅰ』上越市、二〇〇一年、『上杉家御書集成Ⅱ』上越市、二〇〇二年に翻刻されている。
- (14) 『大日本古文書 家わけ第十一 上杉家文書之二』九五二号
- (15) 浅倉有子前掲「近世前期における米沢藩の修史事業と「御年譜」編さん」
- (16) 阿部洋輔「米沢藩御書集」と上杉家文書『上杉家御書集成Ⅰ』上越市、二〇〇一年
- (17) 浅倉有子前掲「近世前期における米沢藩の修史事業と「御年譜」編さん」
- (18) 浅倉有子前掲「近世前期における米沢藩の修史事業と「御年譜」編さん」